

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、本文を省略した箇所がある）。

自己を語るの、相手に自分のことをわかってほしいからだ。それなら、その語りは他の人にとってもわかりやすいものでなければならぬ。人が理解しやすいのは、意味をもったままとまりだ。

ある出来事があった、その結果ある事態が生じた、自分の中にある変化が生じたというようなわかりやすい流れがなければならぬ。そうした流れの a エンディングに今の自分があるのだということが b セットク力をもって語られなければならない。

このように自己はひとつの物語として語られる。そして、自己理解というのも、そのような語りを通して深まっていく。そこで、僕は、自己物語の心理学を提唱してきた。

「自己物語の心理学とは、人はだれもが物語的 c プンミヤクを生きており、その物語的 d プンミヤクに沿って目の前の現実を解釈し、日々の行動のとり方を決定し、また自分の過去を回想し、自分の未来を予想するという立場をさす。」（榎本博明『ほんとうの自分』のつくり方）

自己物語とは、自分の行動や自分の身に降りかかった出来事に意味づけをし、諸経験の間に因果の連鎖をつくることで、現在の自己の成り立ちを説明する、自分を主人公とする物語のことを指す。

自己物語の形成にあたっては、僕が ① 自己物語化と名づけた解釈のプロセスが動いている。自己物語化とは、現在の自己の成り立ちを説明できるような自己物語を構築するために、時間的流れの中に因果の連鎖をつけながら各エピソードを位置づけていくことを指す。

人生の転機ということがよく言われるが、それは自己物語が ② 破綻し、機能 d フゼンに陥ることを指している。

自己物語は、いわば自叙伝のようなもので、新たな経験を組み込みながら日々 e コウシンされている。ただし、新たな経験は既存の自己物語の枠組みに沿って解釈され、組み込まれるため、それほど大きな変化は生じない。かりに自己物語の枠組みにうまく収まらない経験、矛盾する出来事があったとしても、可能なかぎり無視されたり、都合よく歪められたりして、既存の自己物語に組み込まれる。

たとえば、優等生の自己物語を生きている人の場合、試験で悪い成績を取ったとしても、Y など都合よく解釈し、優等生の自己物語は維持される。

でも、自己物語にどうにも組み込みにくい出来事が続くと、はじめのうちは無視したり歪めたりしていても、そのうち無視できなくなる。自己物語に ③ 綻びが見え始める。

たとえば、これまではずっと良い成績が取れていたのに、このところ成績が伸び悩み、今度こそと頑張ったつもりなのにまた悪い成績を取ってしまう。そうなると、優等生の自己物語を維持するのは難しい。そこで、日々のコウシンとは別に、自己物語の大幅な改訂が必要となる。④ 新たな状況にふさわしい新たな自己物語を再構築していく必要がある。人生の転機というのは、このような自己物語の破綻を意味する。

そこでは、過去のさまざまな経験の持つ意味の再点検が行われ、新たな状況によりふさわしい自己物語の再構築が目ざされる。その際、自分にとって都合のよい解釈が可能な経験が拾い出され、わかりやすい流れのもとに位置づけられる。

僕たちは、過去に経験したことがらを抹消したり他の人の人の経験と交換したりすることはできないものの、個々の経験の重みづけや意味づけを変えることで、同じ過去経験の素材を背負いながらも、まったく ⑤ 趣の異なる自己物語を打ち立てることができるとができる。

たとえば、受験に失敗したという事実を変えることはできないけれど、そうした事実に対して、「それまでの努力がまったく無駄に終わった。あれで自分の人生の軌道が狂った」とみたくにネガティブな意味づけをすることもできれば、「あれがきっかけで将来について真剣に考えるようになった」というようにポジティブに意味づけることもできる。

スポーツの盛んな学校に転校したせいで、それまで部活で活躍していたのにレギュラーになれなくなったという事実を変えることはできないけれど、「そのために自信をなくし、のびのびした性格からいじけた性格になり、引込み思案で消極的になった」と A に意味づけることもできれば、「そのために自信をなくしていじけたこともあったけど、頑張ってもなかなか報われない人の気持ちがかかるようになったし、ちょっと消極的にはなったけど、人間的な深みが出たんじやないかと思う」と B に意味づけることもできる。

このような自己物語の破綻と再構築をめぐる ⑥ 葛藤が、ときに個人を危機に追い込む。青年期や中年期が危機となりやすいのも、それまでの生き方を再点検し、ときに大きな方向転換をしていく必要に迫られる、つまり自己物語の大幅な改訂が求められるからだ。そのような意味で、⑦ 人生の危機とは、現実の出来事そのものの危機というよりも、そうした出来事を意味づける自己物語の危機ということができるとができる。

（榎本博明『自分らしさ』って何だろう？ 自分と向き合う心理学』による）

注 ※1 破綻——ものが成立しなくなること。

※2 葛藤——心の中で相反する欲求や感情がからみあい、そのいずれをとるか迷い悩むこと。

問1 波線部 a s e のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、楷書で大きくていねいに書くこと。

問2 傍線部①「自己物語化」とあるが、どうすることか。それを説明した次の文の空欄を指示に従って埋めなさい。

現在の自分がどういう人なのか、他人が聞いても I…本文中より十字以内で抜き出し になるように、これまで自分が経験したこと II…本文中より五字以内で抜き出し をし、 III…本文中より五字以内で抜き出し をつくりながら説明できるようにすること。

問3 本文中の X・Y に入る表現として適当でないものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア たまたま苦手なところばかりで運が悪かった

イ 今回はいろいろあつて集中できなかった

ウ 周りの人がほんとうに勉強を始めた

エ 前の夜に遅くまで頑張らずして眠たかった

問4 傍線部②「新たな状況にふさわしい新たな自己物語を再構築していく必要がある」とあるが、どのような形で再構築していくのか。八十字以内で説明しなさい。

問5 本文中の A・B には、それぞれ「ポジティブ」・「ネガティブ」のどちらかが入る。その組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア A ポジティブ B ネガティブ

イ A ネガティブ B ポジティブ

ウ A ポジティブ B ポジティブ

エ A ネガティブ B ネガティブ

問6 傍線部③「人生の危機とは、現実の出来事そのものの危機というよりも、そうした出来事を意味づける自己物語の危機ということが出来る」とあるが、筆者はどのようなことを言いたかったのか。それを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が慣れ親しんできた自己像を全く異なるものへと変化させなければいけない時期がきてもためらってしまうことが人生の危機だということ。

イ 自分がよりどころにしていた自己像を親しい人たちから否定されて立ち直ることができなくなってしまったことが人生の危機だということ。

ウ 自分が自信を持ち保ってきた自己像を周囲の人が期待するように作り直さないといけなくなってしまうことが人生の危機だということ。

エ 自分自身が納得できるかたちで存在していた自己像を不本意ながらも変えざるを得ないようになってしまったことが人生の危機だということ。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一年のうちで、いちばん忙しい日。いちばん一生懸命で、充実感のある日。そしてちよっぴりさびしい日。それが私のクリスマスだ。

二年まえの春、パティシエの道に飛びこんだ。

地元の大学を卒業、地方銀行の一般職に就職。何不自由ない実家暮らし。順風満帆、青空いっぱい

の人生を歩み始めていた。なのに突然、私はそのすべてを捨ててしまった。理由は明快だった。「人生で、ほんとうにやりたい、たったひとつのこと」に気づいてしまったのだ。

子供の頃から好きだったお菓子づくり。どんなに残業があろうと、帰宅して夜十時から「さあ作るぞ」と取りかかる。「休みの日だけにすればいいのに」と母があきれてため息をついても、「お前の晩飯は、またシュークリームか」と父に A 小

言を言われても、お構いなし。だって、何より好きだから。ケーキを作っているときが、いちばん自分に帰っている気がする。忙しくたって、ちよつと人間関係に疲れてたって、大丈夫。お菓子を作ってさえいれば、 X 元気が湧いてくるんだから。

二年まえのクリスマススイブ。翌日のホームパーティーのために、私は特大のクリスマスケーキを作っていた。

真夜中の、静まり返ったキッチン。スポンジに生クリームを塗って、最後に真ん中に真っ赤なイチゴをぼつりと置いた瞬間、突然気づいてしまった。

どうしてこんなに好きなことがあるのに、私はそれを人生の真ん中に置こうとしないんだろう？

真っ赤なイチゴは、私の心に灯った、ささやかだけれど確かな光だった。

今の仕事を辞めて東京へ出る、という私の決意に母は黙りこみ、父は猛反対だった。私は一晩中、父に語りかけた。どうしても、わかつて欲しかった。父は Y と聞いていたが、やがて立ち上がると、後ろ姿で小さくつぶ

やいた。

「勝手に行ってしまえ」
いつも元気よく話し、大声で笑っている父。幼い私を広い背中におぶって、どこまでも歩いてくれた父。①その父の後ろ姿が、力なくドアの向こうへ消えていった。

ふるさとに一方的に別れを告げて、私はひとりで上京した。
憧れのパティシエのアトリエのドアを何度も叩き、ようやくスタッフになった。朝三時起きで厨房の掃除。買い出しや店頭での販売をして、なかなかケーキ作りに参加できない。去年のクリスマスシーズン、ようやく下地づくりとトッピングを任された。

嬉しくて、必死になった。ルビーのように輝くイチゴを、ひとつひとつ、心をこめてのせていった。
このケーキが、全部売れますように。クリスマスの日、店頭に立って、汗をかきながら接客した。

結局売れ残ってしまったケーキを、パティシエが「来年は完売目指すぞ」と言いながら、渡してくれた。深夜に帰宅してケーキの箱を開け、ひとりぼっちのクリスマスをした。

みんな、どうしてるかな。
家族の顔が目に浮かぶ。一人前にケーキを作れるようになるまで、帰らない。そう決めていたけど、ほんとうはさびしかった。

今年もクリスマスシーズンがやってきた。

「今年のショートケーキ、作ってみる」

パティシエにそう言われて、一気に緊張した。初めて全部任せられたのだ。
出せる力のすべてを注いで、作るんだ。そして、完売したら。

ふるさとに帰ろう。そう決めた。
クリスマスの日、店頭に立った。ひとつ、ふたつ、私のケーキが売れていく。

「完売しそうだな」

パティシエが私の肩を叩いた。

夕方、いちばん売れる時間。突然、私のケーキの売れ行きが止まった。

閉店時間が近づいてくる。私は焦った。このままだと、売れ残ってしまう。あと十分。まだ十ピースも残っている。私は祈るような気持ちになった。

「ケーキいただけますか」

聞き覚えのある声が出て、私は顔を上げた。

まぶしいショートケースの向こうに、父が立っていた。私と目が合うと、ひとつ咳払いをして、目を逸らした。私はあわてて返した。

「どちらになさいますか」

父は、まぶしそうにケースを眺めていたが、やがてふつと笑顔になって言った。

「このイチゴのやつ、全部ください」

私は大きな箱に、十個のショートケーキを、ひとつひとつ、ていねいに並べる。③胸がいつぱいになってくる。ふと、父の声がした。

「ひとつだけ、別の箱に入れてくれますか」

大きな箱と、小さな箱。ふたつの箱を差し出すと、それを受け取った父は、小さな箱を私の目の前にぶっきらぼうに突き出した。

「ほら、お前の分。いい加減に帰って来い」

ドアの向こう、暗い通りへ出て行く父の背中が、Zにじんで見えなくなった。

小さな箱の片隅に、ぼつんと座った、たったひとつのイチゴのショートケーキ。
その夜、私の心を灯すささやかな光になった。
(原田マハ「ささやかな光」による)

問1 波線部a～cの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問2 二重傍線部A・Bの語句の本文中の意味として最も適当なものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 小言を言われても

ア 文句を付けられても
イ 悪口を浴びせられても
ウ 一言つぶやかかれても
エ 静かにさとされても

B ぶっきらぼうに

ア 要領を得ない感じで
イ 投げやりな感じで
ウ そっけない様子で
エ いらだった様子で

問3 本文中のX～Zに当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～カのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ふんわり イ むつつり ウ じんわり エ きらきら オ むくむく カ ぞくぞく

問4 傍線部①「その父の後ろ姿が、力なくドアの向こうへ消えていった」とあるが、ここでの「私」についての説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分がわがままを言ってしまったために、父からいつもの元気が感じられなくなり、もしかしたら体調を崩してしまっているのではないかと思っている。

イ 家族に一方的に別れを告げてしまったために、父を激しく怒らせてしまい、もう二度と昔のような仲の良い家族に戻ることができないと感じている。

ウ 自分の決意をうまく伝えることができなかったことで、父の理解を得ることができず、やさしかった父との関係をこじらせてしまったと思っている。

エ 自分の意志を貫こうとすることで、ずっと支えてきてくれた父をひどく落ち込ませてしまい、大切な父とのつながりを失ってしまったと感じている。

問5 傍線部②「私の肩を叩いた」とあるが、この時の「パティシエ」の気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア うまくいきそうではなかったな、という気持ち。

イ まだまだ気をゆるめるなよ、という気持ち。

ウ 少しぐらいなら休んでいいよ、という気持ち。

エ あとはお前にまかせたぞ、という気持ち。

問6 傍線部③「胸がいっぱいになってくる」とあるが、「私」がこのようになったのはなぜか。七十字以内で説明しなさい。

問7 破線部Ⅰ「私の心に灯った、ささやかだけれど確かな光だった」・Ⅱ「私の心を灯すささやかな光になった」とあるが、それぞれの「光」が表すものについての説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア Ⅰの「光」は、自信を持って好きなことをやることのできるという思いを表しており、Ⅱの「光」は、遠く離れている家族の元にできるだけ早く帰りたいという思いを表している。

イ Ⅰの「光」は、やるべきことが見つかったことから先の未来に期待する思いを表しており、Ⅱの「光」は、自分とちゃんと家族から支えられ認められているという思いを表している。

ウ Ⅰの「光」は、思いがけず未来の目標が見つかった喜びに満ちた思いを表しており、Ⅱの「光」は、これからも自分の目標に向かって努力し続けていこうという思いを表している。

エ Ⅰの「光」は、好きなことをやってうまくいくのだらうかという思いを表しており、Ⅱの「光」は、皆のおかげで着実に自分の人生を歩むことができているという思いを表している。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

映像は本に比べて、はるかに大きな力で見られる者を取りこにします。動くイメージ、音声、音楽などが一体となった力に抵抗するのは、大人でさえむずかしいのですから、子どもはなおさらです。しかも映像は、映像の側の時間の流れに、見る者を従わせます。ビデオなら早送りや巻き戻しもできないわけではありませんが、本を読むときのように自由に立ち止まったり、もともどってみたり、想像力が働きやすいスピードを選んだりというわけにはいきません。

① そんな映像を見ながら、物事を筋道立てて考えたりするのは、ひじょうに困難です。たとえ気になることがあっても、考えようとするうちにも映像は先へ先へと進みますから、それも見ていなければならず、気になったこともじきに忘れてしまいます。ところが本の場合、気になれば立ち止まって考えたり、前にもどってたしかめたりできます。その結果、物語に大きな矛盾が見つかる、せつなく想像力で作りつづけた世界が壊れてしまい、先を読む気が失せることもあります。

あまりにひどい矛盾があるという場合は、作者がちゃんとその世界を構築せずに書いているということですから、そこで起こることに一喜一憂してもむなしと感じるのです。

その点、映像なら、**X** ひどい矛盾があろうとも、ろくに気にする暇もなく先へ先へと進みますから、それなりに楽しみ続けられます。だったら映像のほうがいいかというとき、そうではありません。物事の筋道が通っていないとき、それに気がついてきちんとたしかめられるというのは、人間にとつて必要な能力です。本を読んでいると、要所所でそれまでのことを整理して見る必要を感じ、筋道が通っていることを確認しては先へ進んでいくことになりませんが、だからこそのいいのです。雑に書かれていて読む気が失せるような本は、読む価値がないのであって、本を書く人は、**a** 粗雑さで読者をしらせないように、しっかりとその世界を構築しなくてはなりません。ファンタジーの場合は、その世界が独特な魅力にあふれていけば、たとえ少々の矛盾に気がついていても、**b** 醒めた意識は片すみにしまっておけます。つまり、長く読み続けられてきた本というのは、数多くの読み手による試練を立派にくぐり抜けてきた本だと言えるわけです。

Y、最近子どもたちに人気があるという本には、いたるところ矛盾だらけのものが目立ちます。設定のあちこちに綻びがあっても、子どもたちはそれを気にせず楽しんでます。**Z**、あからさまな矛盾があろうと、少しも気づいていないようなのです。そんな本を読んでみて気がつくのは、それらが、**b** 挿絵があろうとなかろうと、頭のなかに映像を思い浮かべて読むように作られているということです。

目の前にないものを思い浮かべるのが想像力なら、そこにない映像を思い浮かべるのも想像力の働きではありません。しかし、言葉を頼りに情景や人物を思い浮かべ、物語の世界に入りこむことと、作者が言葉によって描き出した映像を思い浮かべることは、明らかにちがっています。最近の物語作者たちは、だれしも映像世代ですから、「ああ、この場面は映画のようだな」と感じさせられることがしばしばあります。カメラがまず風景をとらえ、それから横に移動していくと主人公が

